

Robert L. Frank, *Richistan* 査読書

(Crown NY, 2007)

2007/2/14

山形浩生

1. 概要

アメリカにおいては現在、富裕層が急増している。総資産 100 万ドル以上の人口が、1995 年から 2003 年にかけて倍増している。そしてその中でも、下端の富裕層とトップの富裕層とでは差が開きつつある。こうした富裕層は独自の社会を作っており、さらにこの階層への新規参入者が増えたためにその性格も変わりつつある、というのが本書の主張である。

これを示すため、本書は新富裕層の顕示的な浪費や成功と没落物語、かれらが抱える不安と、慈善活動や政治にもたらす影響などについて実例をひきつつ説明する。

描かれた各種の新富裕層の生態はそれなりに興味深いものではある。また、こうした新富裕層が政治や慈善に与えている影響など、おもしろい論点もある。しかしながら、そのほとんどすべてはたった一言、「成金」に集約されるものでしかない。本書の全編は、アメリカの新興成金がいかに成金めいた活動を展開しているというだけの話であり、それが最初の何章かで見えてしまうと読み物としての魅力は急速に低下する。最後までくると「で、結局それがどうしたんだ」と言うしかない。

新富裕層の誕生の背景分析も比較的通りいっぺん。IT とか証券系マネーゲームとかのおかげです、というのが序章でおざなりに述べられる説明だが……それだけですか？ 読者の誰一人として、何一つ新しいことがわかったとは思わないであろう。

タイトルの *Richistan* は、パキスタン、アフガニスタンのように「国」という意味でのスタンをつけて、まさに金持ちたちが金持ちだけの別世界を築いていることを気取って表現しようとしたものではあるが、この表現自体がわかりにくく、著者のセンスをうたがわせるものとなっている。内容も全体に目新しさに欠け、分析も深みがなく（というより分析そのものがほとんどない）、あまり効用の高くない書物だと言わざるを得ない。

2. 著者について

不詳。どっかのジャーナリストである。

3. 本書の構成と各章の概略

序：本書の成り立ち

富裕層は増えている。そして富裕層は富裕層の中だけでつきあいが閉じる傾向にある。一番下の富裕層は医者や高給取りなどで自力でその地位にのぼりつめ、いまなお所得の半分は給与などの稼ぎ、残りが資産運用だが、上位の富裕層と張り合わなくてはならず、借金漬けになったりしている。中位の金持ちは資産をある程度相続し、そこそこで、資産運用は株式やファンドなどで行い、そこからのあがり所得の大半。トップは、もはやどう使おうとも使い切れないほどの金を持ち、投資先も証券や債券など短期のものではなく、油田や不動産などになる。そして自分の家族を管理してくれるマネージャを雇う。

第一章 金持ちをしつける

富裕層の増加に伴い、女中やコックなど、金持ち向けサービスも急増している。中でももっとも成長しているのが、執事であり、需要に供給が追いつかない。執事の専門学校などもすでに存在し、大人気である。また、金持ちの家族のマネージャ（旅行計画、スケジュール管理などを行う）も需要が高騰している。

さらにそうした職種は、新参富裕層をしつける機能も果たす。中産階級出身の新参富裕層は、人を使う経験がなく、かえってそれをわずらわしく思う。各種ホームパーティや社交も不慣れである。執事や家族マネージャは、そうした新参富裕層を新しいライフスタイルにしつけなくてはならない。

第2章 第三の波

アメリカの富裕層は常に技術革新と結びついてきた。20世紀初頭富裕層は、鉄道や石油といった当時のハイテクで財を築いた。1920年代の富裕層は軍事産業や自動車、メディアの興隆にともなって財を築いた。戦後には、富裕層は減少傾向にあった。そして現在は、過去の波を上回る第三の波がきている。IT長者の増加とIPOやM&Aその他のマネーゲーム、高給取りCEOの増加がその原因である。こうした人々は上場その他で一気に金持ちになる場合が多い。このため、新しい富裕層はかなり若い。グローバル化や金持ち優遇政策もそれを後押ししている。

第3章 成功への道

アメリカの新規富裕層は多様である。本章は、陶器の照明器具で富を築いたエド・バジネットの生涯をたどる。ちょっとしたアイデアから始めた照明器具ビジネスが大ヒットしたが、やがてそれに飽きて会社を売ってしまう。それによって巨万の富を得て、かれは富裕層の仲間入りをしたが、生涯をかけた会社を売ってかなりの空虚さにとらわれたりもした。いまや大豪邸をすさまじく改装し、アートを買いあさったりしている。

第4章 成功を生きる

ティム・ブリクセスは、子供時代にロバの転売をして、材木取引、リゾート開発などを経て不動産で大成功をおさめて40歳で引退してからもまだヨットから働いたりしている。暇つぶしでデートレーディングしたり、慈善団体を運営したりする。いわばワーカホリックの富裕層を構成しているといえる。

第5章 転落

ピート・マッサーは創業した企業が大成をおさめたことで1999年に大金持ちになった。でも2000年にITバブルが崩壊して株価が暴落。債務超過に陥る。富裕層は常に転落の恐怖に直面している。実際、フォーブスの金持ちリスト400人は5年で半分以上が消えてしまう。マッサーは、70歳のときに20代のガールフレンドを得たことで人が変わり、浪費に走るようになって債務超過となった。

第6章 舞踏室の野蛮人たち

かつての金持ちは比較的安定した層で、そうした人々がパームビーチの赤十字舞踏会などの常連となっていた。成り上がりのサイモン・ファイアマンは、慈善活動で気前よく寄付することで常連富裕層に取り入ろうとしてかなりの反発を買った。こうした新参富裕層と古参との対立があちこちで見られるようになっている。新参富裕層は「セレブ」になりたがろうとしている。だが新参者は数が多いのでだんだん古い金持ち地域は浸食されている。

第7章 大きいことはいいことだ

新参富裕層が増えるにしたがって、その中での競争が激しくなる。これは往々にしてヨットや車、ジェットや家、美術品などの持ち物や大盤振る舞いによる見栄の張り合いになっている。かつてヨットがステータスシンボルになったのは、それが操縦をマスターするの

に暇と努力を必要とするものだったからだが、いまや単に大きさ比べになってしまった。

第8章 結果重視の慈善活動

新参裕福層の見栄張りは慈善活動での競争にも及んでいるが、これはいいこともある。フリリップ・バーバーによるエチオピアへの慈善活動はビジネス的な節約を旨としたため、非常に高い効率を実現している。そしてこれは、既存の非効率な慈善活動に対する脅威になりつつある。かれらは結果の出る慈善をしたがる。効率を無視し、募金活動に資金の大半を浪費する従来の慈善団体に対するアンチテーゼとなっている。

第9章 新たな圧力団体

新参裕福層は政治活動にも大きく影響する。ロビイストをやとったり既存政党に献金したりするだけでなく、新富裕層は自分でメディアを使って政治キャンペーンを行ったりする。基本的には新富裕層は共和党支持が多い物の、政治活動では従来の民主 vs 共和党という対立だけでない、政治的争点ごとに各種の政治活動を行うことで、現在の政治的な力関係をきわめて流動的にする可能性を持っている。

第10章 お金持ちでも不安

新参裕福層の半分は、金持ちになっても幸せになっていないと答えている。こうした不安を解消するためのサポートグループが存在するくらい。

第11章 富裕層の子どもたち

富裕層の子どもたちは、独自の学校に通い、相続などについてトレーニングを受ける。かつてはお金について家族の中で話すのは下品だったが、いまはそうではなくなった。

エピローグ 富裕層の将来

(テキストなし)

4. 評価

描かれた各種の新富裕層の生態はそれなりに興味深いものではある。また、こうした新

富裕層が政治や慈善に与えている影響など、おもしろい論点もある。しかしながら、そのほとんどすべてはたった一言、「成金」に集約されるものでしかない。本書の全編は、アメリカの新興成金がいかに成金めいた活動を展開しているというだけの話であり、それが最初の何章かで見えてしまうと読み物としての魅力は急速に低下する。最後までくると「で、結局それがどうしたんだ」と言うしかない。

新富裕層の誕生の背景分析も比較的通りいっぺん。IT とか証券系マネーゲームとかのおかげです、というのが序章でおざなりに述べられる説明だが……それだけですか？ 読者の誰一人として、何一つ新しいことがわかったとは思わないであろう。

読むに値するのは、執事養成学校の様子を述べた第一章、慈善の章、政治の章くらい。その他の部分については、読み物としても散漫。「A はかつて大きなヨットを持っていたが、ある日まわりにもっと大きなヨットがたくさん出現して見劣りするようになった。でもその後、もっと大きなヨットが出てきた」などという話をだらだら読まされるのはいささかうとうしいほど。

エピローグは含まれていなかったため、本書が結論としてどのようなところに話を落そうとしたのかは不明ながら、それまでの筆致からある程度は予想がつく。金持ちはますます独自の価値観にしたがった金持ちだけの世界に生きるであろう、というような結論となるのはほぼまちがいない。しかし、そうした結論だとすれば、あまり説得力はないであろう。独自の世界といっても描かれているのは、かつて「刑事コロンボ」の悪役として登場してきたような金持ちばかりで、しょせんはそこらの成金と大差ない以上、あまり別世界的な印象が薄いからである。

タイトルの **Richstan** は、パキスタン、アフガニスタンのように「国」という意味でのスタンをつけて、まさに金持ちたちが金持ちだけの別世界を築いていることを気取って表現しようとしたものではあるが、この表現自体がわかりにくく、著者のセンスをうたがわせるものとなっている。全体に目新しさに欠け、分析も深みがなく（というより分析そのものがほとんどない）、あまり効用の高くない書物だと言わざるを得ない。

5. 期待される読者

そのまま出してどういう読者がつくかはまったく不明だし、だれに読ませたいかというのもことさら思いつかない。だれにも関心をもたれないのではないかと危惧される。「アメリカセブ社会の実態！」「これがアメリカ格差社会！」といった宣伝文句で売り逃げる手はあるかもしれないが、成功するかどうかはわからない。